都中社研会報

東京都中学校社会科教育研究会
発行者　佐藤田橋原師　敏重雅秀　数久也行巌澄
編集部長　佐石村椎藤薬　真
編集副部長当
編集副担当
編集担当

会長あいさつ

東京都中学校社会科教育研究会　会長
佐藤敏数
（羽村市立羽村第三中学校長）

令和元年五月二十四日に東京都教職員研修センターにて開催されました「平成三十一（令和元）年度東京都中学校社会科教育研究会総会」において、会長に選出されました、羽村市立羽村第三中学校長、佐藤敏数（さとうとしかず）です。どうぞよろしくお願いします。この三年間は、武蔵村山市教育委員会で学校教育担当部長の任に就いており、肝心の社会科に関する研究はもちろんのこと、都中社研の活動そのものから離れている状況でしたので、私自身がいわゆる「浦島太郎」の状態となっております。しかしながら、このたび、会長という身に余る大役を仰せつかり、その任の重さにとても戸惑っておりますが、会員の先生方に御支援・御協力をいただきつつ、本会の発展と研究の充実、生徒の学力向上のために努力して参りたいと考えていますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

さて、前任の髙山知機会長の下に進められてきた研究に重ね、今年度も令和三年に開催を予定している東京大会のテーマである、「グローバル化する社会を生き抜くこれから生徒を育てる社会科学習―よりよい社会を実現するための資質・能力の育成―」の下、各分野の専門委員会で精力的に研究が進められています。言うまでもなく、この令和三年は学習指導要領の全面実施ということと併せ、都中社研にとって重要な時期となります。そのような時期に開催される東京大会に向けて、私は次のようなテーマを掲げて会の運営に当たっていきたいと考えています。そのテーマとは、「持続可能な都中社研の構築」です。

このテーマを掲げた理由ですが、私ごとになりますが、私と都中社研との出会いは、初任三年目のときに地区の教育研究会で、「歴史専門委員会の委員として研究会に参加し学んできなさい。」と半ば強制的に委員に選出され送り出されたことに始まります。しかし、今振り返ってみると、このときに参加していなければ、「都中社研というものがあるのは知っている。しかし、研究発表会があってもわざわざ行く必要はないな。」と都中社研とのかかわりをもっていなかったのではないかと思います。このような自身の経験や会の現状を考えたときに、「都中社研は社会科教員に認知されているのか。」、「取り組んでいる研究成果は伝わっているのか。」そして何よりも、「先生方は都中社研の研究成果を各校での授業実践に役立ててくれているのか。」と考えてしまいます。これは、「オール東京」での東京大会の開催を目指したとき、今の都中社研にとっての大きな課題であると思うのです。また、社会全体で大量退職が進んでいる中で、教員の世界でも同様に大量退職が進んできています。このことは都中社研においても同様であり、今後、「都中社研における今までの研究の成果をどのようにして残し、継続していくのか。」、「そのための要となる人材をどうやって発掘していくのか。」が課題となります。

この「持続可能な都中社研の構築」は、当然のことながら会員の皆様の御支援・御協力なく進めることはできません。先生方と共に本会の活動を進めていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

総会の講演について

東京都中学校社会科教育研究会　相談役
髙山知機
（世田谷区立駒留中学校長）

令和元年五月二十四日（金）、東京都教職員研修センターにおいて「令和元年度　東京都中学校社会科教育研究会総会」が開催されました。その際、文部科学省初等中等教育局教育課教科調査官の藤野敦先生から、「新学習指導要領評価の基本的な考え方と学習内容の構造」をテーマに、ご講演を賜りました。

冒頭、平成三十一年一月二十一日と三月二十九日に発出された、中央教育審議会と文部科学省の評価・観点に関する報告・通知についての解説をいただきました。

評価の基本的な考え方として、①指導・教育課程の改善、教育活動の質の向上のための「評価」、②主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善のための「評価」、そして、③児童・生徒の学習改善、教師の指導改善のための「評価」という、三つの視点が示されました。併せて、これまでの慣行によってのみ行われているような、必要性・妥当性が認められない評価の見直しについてもご提言がありました。

学習評価の基本構造として、「知識・技能」「思考・判断・表現」と別に、「主体的に学習に向かう態度」については、個人内評価を通じて見取る部分があることに留意する必要があるとのお話がありました。

具体的な「評価」の方法として、「知識・技能」については、定期考査などのペーパーテストや、文章による説明やグラフ等を用いた観察・実証を表すレポート類、「思考・判断・表現」については、レポートや話し合い活動をまとめた制作作品やポートフォリオの活用など、具体的な例を交えたご説明をいただきました。

学習内容の構造については、あらためて「学習指導要領」に示された中学校社会科の目標の確認がなされました。その上で、地理・歴史・公民の三分野と三つの観点とをまとめた「3×3」のマトリックスをもとに、それぞれの分野で、何をどの観点で評価するのかを、視覚的かつ具体的にご指導いただきました。

最後に、あらためて今般の改訂の要点について、地理的分野では、世界規模・地球的規模の視点から学習すること、地域調査の内容構成の見直しと防災学習の重視、そして、歴史的分野では、我が国の歴史的背景となる世界の歴史の充実、主権者教育の観点から、民主政治の来歴、人権思想の広がりについての学習の充実についてお話があり、大変具体的かつご示唆に富むご講演を賜り、社会科教員として有意義な時間となりました。

夏季巡検に参加して

東京都中学校社会科教育研究会歴史専門委員会　委員長　松　本　　賢
（武蔵村山市立第四中学校）

八月一日、真夏の強い日差しの下、羽村市郷土博物館館長の河村先生を講師に迎え、羽村の取水堰を中心に、夏季巡検が行われた。

研究員の御岳山の合宿などでは「自然がいっぱいで、ここは東京なの？」と区部の先生方に言われてしまう多摩地域である。しかし、今年は小学校四年生の社会科見学で行くことが多い玉川上水の羽村取水堰を中心とした巡検なので、積極的に参加した。

まず、見学したのは、羽村駅東口のまいまいず井戸。近くに多摩川が流れているのに、河岸段丘上のため、すり鉢状に掘り下げて水を得ていた。近くの五ノ神社の鳥居も、しめ縄ではなく、棒状になっているのは、田んぼが少なく、藁を得られなかったからとのこと。

羽村駅西口を出て、どんどん下り、羽村取水堰に到着。玉川上水に水を引き込むための多摩川の川筋から、ここに取水堰をつくった理由がわかった。また、玉川上水の水門の破壊と洪水を防ぐために、大水の時は堰を払ってしまう投渡堰は、江戸時代から現代まで変わらぬ技法が用いられていることや、川底が削られると上水に水が流れなくなるので、川底を守る工夫がなされていることを知ることができた。

多摩川を渡って、河沿いに、羽村郷土博物館へ。青梅街道や五日市街道沿いの屋敷林として多く植えられているケヤキは投渡木の材料になっていたことや、堰の修復によって、羽村は水番人を中心に土木建設業のような仕事を請け負っていたなど、新しい研究を聞くことができた。

小学校四年生以来、何度も訪れたことのある羽村取水堰だが、河村先生の説明によって、新たな発見が出来るなど、有意義な夏季巡検であった。

［追記］

台風十九号の過ぎ去った十月十三日に、羽村取水堰を見に行ったら、投渡堰の投渡木が上がっており、堰が払われていた。そのため、玉川上水には、あふれるほどの増水はなく、江戸時代から続く技術を感じることができた。

被害に遭われた地域の皆様の一日も早い復興を祈っています。

夏季研修に参加して

齋　藤　卓　也（杉並区立東原中学校）

「皆さんはこの夏休み、どこかへ行きましたか？　何をしましたか？」令和最初の夏季研修会は、港区立高松中学校で、元全国中学校社会科教育研究会会長、杏林大学非常勤講師の石上和宏先生をお招きして「新学習指導要領の実施に向けて社会科教員に求められるもの」というテーマについて、冒頭の質問から始まりました。

講演では初めに新学習指導要領のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」「カリキュラム・マネジメント」「育成を目指す資質・能力」「社会に開かれた教育課程」「社会的な見方・考え方」「学びの地図」といったもののうち、社会科の授業で重視するものは何か二つ選び、三～四名のグループでお互いの意見を発表し、それぞれの考えを共有しました。

次に、「ＪＲで次になくなると予想される仕事は何か？」という問いに対して、今度は理由を踏まえてアイデアを出し合いました。

続いては「白」から連想されるものをブレーンストーミング形式で挙げ、さらにそれらの中で「黒にしたら価値が上がるものは？」という発展的な問いへとつなげてグループワークを進めていきました。

今回の研修会は、講演の中に演習を組み込んだ、実践的かつ有用性に溢れたものでした。その中で私が最も印象に残ったことは、石上先生の「先生が楽しく授業に取り組み、学ぶことが楽しいというオーラを生徒へ伝える」、「先生が楽しそうに学んでいる姿を見せることが、生徒を感化し、学び続ける人を育ててくれる」というお言葉でした。まさに冒頭の質問の中にそのことが込められていたと、講演会を聞いていくうちに実感が湧いてきました。

日々の教材研究は終わりがなく、時間と疲労との勝負になることもありましたが、振り返ると、新たに知ることができた感動や喜び、充実感がありました。これを生徒へ伝えたい、こんな授業をしたい、という考えた時、実際の授業も生徒が楽しいと感じてくれるものになったことが多かったことを思い出しました。生徒が楽しい、もっと知りたいと感じる社会科の授業の実践に向けて、初心に帰り、学ぶことができた研修会でした。

令和元年度　**都中社研役員**

会　長	佐藤敏数・羽村　第三	
副会長	田口克敏・杉並　和田	
〃	浦山裕志・墨田　錦糸	
〃	今田敏弘・世田谷世田谷	
〃	関　基雄・練馬大泉第二	
会計監査	中山　徹・練馬光が丘第一	
〃	高田はつほ・足立第十三	
研究部長	田口克敏・杉並　和田	
副部長	池下　誠・練馬大泉西	
〃	高田孝雄・足立東綾瀬	
〃	三枝利多・目黒　東山	
研究部員	入子彰子・文京　音羽	
〃	松井敏孝・北　王子桜	
〃	鈴木拓磨・墨田　両国	
〃	千葉一晶・中野　第七	
〃	中村　豊・江戸川小松川第二	
〃	長井利光・杉並　泉南	
〃	種藤　博・中央　銀座	
〃	東野茂樹・葛飾　水元	
〃	金城和秀・芸大附属世田谷	
三分野専門委員長	藤田　淳・港　高松	
地理歴史公民編集部長	松本　賢・武蔵村山第四	
〃	藤田琢治・練馬大泉学園	
副部長	石田重久・中野　第二	
〃	村田雅也・足立第十一	
編集部員	椎橋秀行・荒川　第五	
〃	藤原　巌・東久留米東	
〃	関　眞規子・文京　第六	
〃	志村　淳・中野　第四	
〃	薬師真澄・東久留米東	
〃	下澤洋平・東久留米下里	
事務局長	中野英水・板橋赤塚第二	
副局長	種藤　博・中央　銀座	
事務局員	高野祥一・白鷗高付属	
〃	河合　仁・練馬　中村	
〃	鈴木拓磨・墨田　両国	
〃	上田純一・中央　晴海	
〃	渡邊智紀・お茶の水附属	
〃	伊東賢治・中央　佃	
〃	山崎俊輔・足立西新井	
〃	福崎裕崇・荒川　第四	
〃	歳納隼人・品川荏原第一	
〃	長井利光・杉並　泉南	
〃	平瀬智明・国分寺第五	
〃	丹　暁子・足立第七(特)	
相談役	齋藤博志・専修大学	
〃	石上和宏・杏林大学	
〃	高岡麻美・府中府中第三	
〃	竹原　眞・江東深川第四	
〃	高山知機・世田谷駒留	